# 仙北市読書感想文コンクール

令和２年度

令和２年度仙北市読書感想文コンクール（仙北市教育委員会主催、角館図書館後援会・㈱新潮社後援）が行われ、応募総数95点の中から仙北市長賞小中学校の部に佐藤優美さん（西明寺中学校３年）、高校の部に鈴木愛唯さん（角館高校２年）が選ばれました。仙北市長賞受賞作品について、それぞれ原文のままご紹介します。

## 仙北市長賞

小中学校の部

### 『本当の友達と心の強さ』

西明寺中学校3年　佐藤　優美

どこまでも続く青空の中に「もこもこ雲」を探す私。本当の友達って、どんな人を言うのだろうか。私には本当の友達はいるのだろうか。そんな疑問や不安ばかりが、私の頭の中を駆けめぐる。幼い頃から、「みんなと仲良くしなさい」「たくさんお友達をつくりなさい」と言われてきた。その時は、何の疑問に思うことはなかったが、一言で「友達」といっても、実に奥が深く、嬉しい響きでもあり、時には重くのしかかる言葉だ。そして、今までは「本当の友達」という言葉から怖くて逃げてきていたが、真剣に前向きに考えてみようと心に決めた。私は勇気を出し「きみの友達」恵美のいる世界へと足を踏み入れた。

この物語は、主人公それぞれが、「友達」に関係することで抱えている悩みや葛藤があり、日々の生活の中で、時には喧嘩や嫌な思いをしながらも、「友達」について真剣に考え、向き合い、成長していく内容になっている。同時に、読んでいる側へも本の題名にあるように『きみの友達』は?」と投げかけている。本当の友情とは何か、深く考えさせられる物語だ。

交通事故に遭い障害を持ったことで、人とのつき合いに距離を置き、自分の殻に閉じこもっていた恵美。そんな時、病弱な由香と出会い、二人は友達になった。お互いを必要とし、心から信頼できる、かけがえのない存在になった。温かい、優しい時間が恵美と由香を包み込んでいた。しかし、由香は病気で亡くなってしまったのだ。大切な友達を失った恵美は、どんな気持ちだったのかと、私は想像するだけで胸が苦しく、切なくなった。私なら、深い悲しみで周りが見えなくなるくらい、暗い世界になってしまう。しかし、恵美は違った。下を向き立ち止まったままではなく、しっかり前を向き歩き出したのだ。私にはない、心の強さが恵美にはあった。

以前、道徳の授業で「本当の友達とは」というテーマをクラスで話し合った。一人ひとりが、思い思いに意見を出し、時には笑い、時には涙を流しながら、真剣に向き合い話し合った。授業後、ふと一人になった私は、改めて「本当の友達」について考えた。私には、「本当の友達」はいるのだろうかと。私には、とても仲のいい、気の合う友達がいる。その友達と一緒だと毎日が楽しく、ずっと仲良くしたい「本当の友達」だと思っている。しかし、その友達は、私のことをどう思っているのか、もしかしたら「本当の友達」と思っていないのではないかと不安を抱いた。考えれば考えるほど、不安は募っていくばかりだった。同時に、自分が「本当の友達」だと思っている人に対し、疑問に思った時点で、私はその人にとって「本当の友達」だと思ってもらえる資格がないと思った。なぜなら、相手を疑い、自分自身を信じていないからだ。

では、どうしたら「本当の友達」と呼べるのか、言葉の重みを考えたとき、恵美の言葉が頭によぎった。それは、「いなくなっても一生忘れない友だちが、一人、いればいい」という言葉だ。その言葉が私の心に響き、霧が消えていくようだった。なぜなら、私も同じように考えていたからだ。見せかけだけの友達はいらない。その時だけ楽しく、一緒に過ごすのではなく、時にはぶつかりながらも、お互い心から信頼しあえる関係こそが、本当に大切で必要だと思うからだ。恵美は一人でも決して負けない心の強さがあり、「本当の友達」と呼べる由香と出会い、私は羨ましく思った。しかし、恵美は今まで誰よりも「友達」の在り方を真剣に考え、悩み、自分の心に素直に向き合い、自分自身でつかんだ「本当の友達」と、心の強さなのだと思った。そして、由香を本当の意味で「友達」と呼べ、心から信頼していたからこそ、由香が亡くなっても、由香と過ごしたかけがえのない日々は、恵美の心にいつまでも生き続け、光を照らしてくれるのだと。本当の友達と出会ったことで、恵美の心は強く、まっすぐ前を向き、未来へと進んでいるのだと思う。私は、恵美を羨ましいと思う前に、まずは私自身が「なりたい私」「本当の友達」について、真剣に向き合い、行動し、自ら築き上げていくことが大切だと思った。

私たちは日々の生活で、多くの人によって支えられ生きているということを忘れてはならない。そして、言葉は時に凶器にもなり、優しく包む絆創膏にもなるということも。このことをしっかり理解したうえで友達とかかわっていきたい。何よりも、自分自身をしっかり信じられる、そんな「心の強さ」を持ちたいと思う。私は、「みんな」ではなく、少なくてもいいから、たった一人でも自分が「友達」と呼べる友と、ずっとつながっていたい。いつか「本当の友達」と出会ったとき、今とはまた違った日常、景色が見えると信じて。ふと見上げた青空の中に、「もこもこ雲」が顔を出し、私に微笑みかけたような気がした。

◆読んだ本『きみの友だち』（新潮社）

## 令和２年度 仙北市読書感想文コンクール審査結果（学校名・学年・氏名　※敬称略）

**小中学校の部**

◆仙北市長賞
西明寺中学校3年　佐藤優美

◆角館図書館後援会長賞
角館小学校3年　戸澤穂乃

◆仙北市教育長賞
西明寺小学校2年　菅原丈路
角館小学校6年　村岡すみれ

◆新潮文庫賞【特別賞】
西明寺中学校3年　佐藤優美

◆奨励賞
桧木内小学校1年　佐藤寧音
桧木内小学校2年　藤原花音
桧木内小学校3年　武藤颯佳
西明寺小学校4年　高橋凛
生保内小学校6年　鈴木亜緒依
神代小学校6年　石川才稀
桧木内中学校2年　鈴木千寛
桧木内中学校3年　浅利菜羽

◆入選
角館小学校1年　坂本すみれ
神代小学校2年　小原康之介
西明寺小学校3年　傳農紅雪
角館小学校4年　佐藤優志
角館小学校6年　菊地璃桜
角館小学校6年　菅原雅人
神代中学校2年　小原里子
西明寺中学校3年　佐々木萌果

**高校の部**

◆仙北市長賞
角館高校2年　鈴木愛唯

◆角館図書館後援会長賞
角館高校1年　三河野乃香

◆仙北市教育長賞
角館高校3年　富樫綸

◆新潮文庫賞【特別賞】
角館高校1年　鈴木未来

◆奨励賞
角館高校1年　鈴木未来
角館高校1年　武田穂香

◆入選
角館高校2年　細川千鶴
角館高校3年　伊藤李奈

## 仙北市長賞

高校の部

### 『思い出を修理する言葉たち』

角館高校2年　鈴木　愛唯

私がこの本を読もうと思ったきっかけは、地元の本屋で見つけ、表紙と題名に惹かれ手にとったことだ。手にとり、プロローグを読んでみて、物語の続きがどうしても気になってしまったのでこの本を読もうと思った。

うまく友だちを作れない十歳の少女ピピは、ただ一人の味方だった祖父の形見を直すため、不思議な「思い出の修理工場」に迷い込むというのがこの本のあらすじだ。話が進むにつれて、ピピの元いた世界に異変が起こり、人々の幸せをお金に代えようとするエージェントたちが人間たちから思い出を奪い始める。人々が思い出を失っていくたびに工場に運ばれてくる思い出も減り、工場を閉鎖に追い込もうとするエージェントたちにピピと仲間が立ち向かっていく。

私には読んでいて印象に残った言葉と場面がある。一つ目は、「急がなければならないことほど、ゆっくり。急がなくてよいことほど、速くやること」という言葉だ。これはピピが迷い込み、働くことになった工場の工場長ズッキがピピに向けたアドバイスである。この言葉を読んだ時、普段の日常生活でも活用できる言葉だと思った。私はこれを急いでいる時は焦らずに物事を進めるというように解釈した。私はこの言葉から、自分が体験したことを思い出した。私が中学生の時に美術部で展覧会に出品する作品の構想を考えていたが、自分は何を描きたくて、どうやって表現したら良いのか分からず焦っていた時があった。そんな時、私は一旦落ち着いて作品のことを考えない時間を作った。そうすると、どこかのタイミングで作品のアイデアが浮かんでくることがあった。現在も、高校で美術部として活動しているが、中学生の頃のように、自分が今、焦りを感じていると思った時にこの方法を使っている。二つ目は、「幸せというものは人から奪うものでも、誰かを陥れて手に入れるものではない。目の前のことをひとつひとつ積み重ねていくうちに、いつの間にか手に入っているものなのだ。人をうらやみ、他人の幸せを奪おうとするものが一番不幸なのだ。」という言葉だ。これもズッキの言葉で、私はこの言葉に共感した。幸せと感じたりするものは人それぞれで、それをその人から奪ったとしても、奪った人が幸せになることはない。私たちは課題や問題を努力して乗り越えた時に幸せを手に入れていると考えれば、今よりも勉強や部活動に励むためのモチベーションになるのではないかと思った。これを考えた時、私にとっての幸せとは何かと思った。考えた結果、湯船に浸かったり、ゲームをしたり、絵を描くことが私にとっての幸せだ。また、ゲームであれば自分でお小遣いを貯めて買うという行為もズッキの言葉にもあったひとつひとつの積み重ねなのだろうと気がついた。最後に印象に残った場面は、ピピが亡くなった祖父の遺志を受け継ぎ、ピピの住む町のシンボルである時計を直すという場面だ。時計は解体されることになっていて、解体されるまでに直さなければズッキたちのいる工場が閉鎖され、ピピの祖父が亡くなるまで仕事として行っていた時計の修理を成し遂げることができないという内容だ。私は、この場面を読んでいてとてもハラハラした。ある程度話が進むと、時計の解体セレモニーまであと二十四時間、というようにカウントダウンが場面の最後に書かれている。それを読むたびにピピを応援する気持ちになった。手に汗を握るような緊張感があり、前半のゆったりとして温かい雰囲気と違っていて読んでいて楽しかった。私も祖父母が郷土芸能をやっていて、弟は祖父から太鼓、私は手踊りを習っているので、祖父母が受け継いできたものを私たち若い世代がそれを大切に受け継ぎ、守っていきたいと思っている。

この本から私は、自分の過去を振り返りながら、これからも大切にしていかなくてはならないことについて学ぶことができた。また、本に書いてある通りの選択だけでなく、私がもしピピの立場だったらこうするだろうと考えることや登場人物の容姿、工場の様子も想像して楽しむことができた。高校に入学してから読書をする機会を自分から無くしていた。改めて、本を読むことの大切さや読みながら自分で想像することの楽しさなどに気付くことができたので、これを機にこれからも読書をしていきたいと思う。また別の本と出会い、新しい気付きや想像ができるのが楽しみだ。

◆読んだ本『思い出の修理工場』（サンマーク出版）